

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第3話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ（25）（30）…騎

士団長

チビイ…ルチェリールタの相棒魔族

シャーザベスラ…ヌノの皇女

シャーニューニダ…魔族

ニユンリン…蜘蛛サキュバス魔族

所長…ラフドナ研究所所長の女

店員…宿屋レストラン店員

○ラフドナ城下町 A

シャーニューニダ「これを見ろ」

シャーニューニダ、懷から魔素結晶（

マナライト）を取り出す。

ルチェリールタ「マナライト？」

シャーニューニダ「そうだ」

チビイ「マナライトってなんだ？」

ルチェリールタ「魔素……わかりやすく言う

と、魔法の力が込められた結晶のこと。で

……これがどうしたの？」

ルチェリールタ、シャーニューニダを

見る。

シャーニューニダ「やつらの首領がこれを大

事そうに持っていたんだ。だから、隙をつ

いて盗み出してきた。お前たちは、ゲドン

族を殲滅したいんだろう？ 何か手がかりに

なるかもしれない。使え」

ルチェリールタ「使えってどうやって？」

シャーニューニダ「王国に研究所はあるか？」

ルチェリールタ「あるけど」

シャーニユーニダ「じゃあ、そこに行くべきだ」

シャーニユーニダ、マナライトをルチェリールタに渡す。

○ラフドナ研究所・研究室

所長「それで、これを分析にかけてほしいというのでしょうか？」

ルチェリールタ「お願いできる？」

所長「わかりました」

所長、うなづく。

ルチェリールタ、研究所所長にマナライトを渡す。

所長「これを成分分析にかけて」

研究員 A 「はい」

研究員、機械にマナライトをセットする。

時間経過。

研究員 A 「結果が出ました。これは極めて高

濃度の魔素が凝縮されたマナライトのよう
です。こんなにも高濃度のマナライトは非
常に珍しいですね」

ルチェリールタ、マナライトを返され
る。

研究員 B 「そしてこれは、一見わかりづら
いですがひとつの塊が何個かに分けられてい
ます」

ルチェリールタ、マナライトをじつと
見つめる。

所長 「あ、そうだ。ルチェリールタ様、こち
らへ」

○同・培養室

ルチェリールタたち、ゲドン族の死体
の前に案内される。

所長 「安心してください、この化け物は動き
ません」

ルチェリールタたち、ゲドン族の死体
を見つめる。

「グオオオオオ」

死体がうめき声をあげる。

ルチェリールタ「！」

所長「な：これは？まさか：：マナライトに
反応した？」

ルチェリールタ、近づける。

マナライトが光り、怪物の死体が消え
る。

所長「は！？」

研究員たち、ひどく驚く。

所長「これは：：ゲドン族の対抗策になりう
るんじゃない？ ルチェリールタ様、これはす
ごい発見ですよ！」

所長、興奮気味に叫ぶ。

○ヌノ船着き場・受付

シャーニユーニダ「まさかあんなことが起こ
るなんてな。よかったな、これでお前の目
的を果たせるかもしれない」

ルチェリールタ「そうだね」

ルチェリールタたち、受付を済ませる。

○タ杜王国・どこか

T「タ杜王国」

男A「ニュンリンさま……」

人間たち、ニュンリン（魔族態）を見て怯える。

ニュンリン「さあ、生贄をよこしなさい」

ニュンリン、口角をあげてニヤリと笑う。

○同・街道（夜）

ルチェリールタ、町を見回す。

シャーザベスラ「もう夜だね。ルチェリールタはここは初めてかい？」

ルチェリールタ「はい。遠征とはいっても他国まで行くことはまれなので。タ杜王国に来たこと自体はあるのですが」

シャーザベスラ「それじゃ、泊まるところで探そうか」

ルチェリールタ「そうしましょう……にしても、夕杜ってこんなに活気のない国だったっけ？もっと、文化やお祭りが盛んだと記憶してたけど……文化って言う意味では、文化の保存と継承を目指すヌノと似てますね？」

と、首をかしげる。

チビィ「あ、あそこでみんなの探してるいろ、占ってもらおうぜ？」

チビィが示す方向に、占いの館。

○占いの館（夜）

占い師「ほう……こんな街にわざわざ旅に来るやつがおるとはの」

神妙な雰囲気を放っている占い師。

ルチェリールタ「どうかしたんですか」

占い師「それはの。この街は魔族に支配されておるからじゃ」

ルチェリールタ「魔族？」

占い師「やつらは猛毒を使う。人間をさらつ

てはエネルギーを吸い取っておるのじゃ……
気を付けるんじゃない」

占い師の言葉に、チビイがふるふる震える。3人は反応が薄い。

占い師「それはそうと……おまえさんたち、
占いをしてもらいにきたんじゃないろ」

ルチェリールタ「あ、そうでした」

占い師「では、見てしんぜよう」

占い師、水晶を見つめ謎の動作でぶつ
ぶつ喋る。

占い師「な……これはどういことじゃ？」

占い師の顔がこわばる。

占い師「邪悪な気が邪魔して全く見えぬ」

チビイ「え？ 邪悪な気？ なんでだよ？」

シャーザベスラ「シャーニューニダじゃない
のかい？」

シャーザベスラ、シャーニューニダを
手で指し示す。

占い師「わからぬ……すまぬ。お代は取らぬ
から占いは終わりじゃ」

○宿屋・レストラン（夜）

内装の雰囲気を感じさせる。何人か客がいて、料理人が料理を作っている。

ルチェリールタたちは卓を囲っている。

チビィ「結局なんだったんだよあの占い師！

詐欺師ってことか？」

ルチェリールタ「でも、それならお代いらないなんて言う？」

ルチェリールタは考えている。

シャーニューニダ「期待して損したな」

シャーニューニダ、腕を組む。

店員「お待たせいたしました、ごゆっくりどうぞ」

卓に料理が置かれる。

シャーザベスラ「僕は各国王都の場所は覚えてるから、そこにいらしたら占いに頼らなくても大丈夫……といいたところだけど、急を要してるからできれば知りたかつ

たね」

ルチェリールタ「それよりも今、気になるのはこの街の魔族についての話」

シャーニューニダ「よほどの相手が来ない限り、正直英雄級の3人がいれば過剰戦力だろう……ところで、ルチェリールタは最強として有名だが、なぜ英雄と呼ばれない？」

ルチェリールタ「さあ？　っていうか、歴史上500年間英雄が生まれてない」

シャーニューニダ「英雄は神に認められることでなれるとされている……神が厳しくなったのか」

シャーザベスラ「そうだろうね。だけど」

シャーザベスラ、ルチェリールタの方を向く。

シャーザベスラ「皇女としてこの言葉を贈ろう。僕は……君のことを英雄だと思っているよ。可能なら君を英雄にしてあげたいよ」

ルチェリールタ「身に余る光栄です、皇女様」

ルチェリールタ、軽くお辞儀。

チビイはストローで水を飲んでいる。

○同・個室（夜）

シャーニューニダ「お前たちは寝るといい。

我のことは気にするな」

ルチェリールタ「そう？魔族は寝なくてもと

は言うけど……」

シャーザベスラ「ルチェリールタ、安心して。

見張つとくから」

ルチェリールタ「え？それは申し訳ないです

よ……」

シャーザベスラ「（食い気味に）大丈夫」

ルチェリールタ、しぶしぶ納得する。

ルチェリールタとチビイ、寝る。

シャーニューニダ「寝ないのか」

シャーザベスラ「いい意味でお人好しの騎士

団長さんと違って、僕は疑り深い性格だね。

王族の子を狙う勢力がいるから、慎重にな

ってしまふのさ、いざとなったら、君を殴

る」

シャーニューニダ「我はお前たちに利用価値を感じているから、裏切りはしない」

シャーザベスラ「利用価値がなくなったら捨てる気かい？」

シャーニューニダ「そんなことは起こらない。兄ほどの強い魔族が行方不明となれば、なにか巨大な力が関わっていることはほぼ確実だからな」

シャーザベスラ「そうかい」

○夕杜王国・街道（朝）

ルチェリールタたち、外に出る。

シャーザベスラ「じゃあ、聞き込みをしようか」

ニウンリン「あ、あのー」

声をかけられ、4人振り向く。

ルチェリールタ「！」

ニウンリン、露出度の高い服装。豊満な肉体をくねらせて近づく。

ニウンリン「あーし、道に迷っちゃって。助

けて……あなた、美人ですね……」

ルチェリールタ「あ、えっと……えへ、えへ

へ……」

ルチェリールタ、ニユンリンに迫られてドキドキして照れる。

シャーニューニダ「ルチェリールタッ！」

シャーニューニダ、叫ぶ。

ルチェリールタ「ぐっ」

ニユンリンの体から、大きな蜘蛛の足が生える。

ルチェリールタの脇腹に蜘蛛の足が刺さる。ルチェリールタ、意識を失う。

それを見ている民衆たち。

シャーザベスラ「ロンリーシャークッ！」

シャーニューニダ「はあっ！」

2人の攻撃。

ニユンリン、素早く糸を張って防御。

シャーザベスラ「な……無傷だって!?」

ニユンリン無傷。人間態から魔族の姿へ変化。高さ3メートル強。

ニユンリン「じゃあねー」

ニユンリン手を振り、ルチェリールタ
を抱えて跳び去る。

○宿屋・個室

チビィ「くそっ！ ルチェリールタが連れ去
られた！」

シャーザベスラ「不調とはいえ、僕の攻撃が
効かなかった。しかもシャーニューニダの
攻撃まで効かなかった……」

シャーニューニダ「サキュバス……」

3人の間に漂う深刻な雰囲気。

シャーニューニダ「しかもあいつ、異種交配
で生まれた魔族だ。異種交配なうえに同性
まで籠絡できるとなれば相当やっかいだぞ」
チビィ「そんな……それってめっちゃくちゃヤ
バいつてことじゃないか！」

○ニユンリンの住処・大部屋（夕方）

ニユンリン、人間態に戻る。

窓がない、広い部屋。

ルチェリールタは両腕を縛られて吊るされている。

ニユンリン「目覚めた？　すごいね、まだ夕方。こんな短時間で目覚めるなんて。ふつうは何日だろうと寝かせられるのに」

ルチェリールタ、目覚める。

ルチェリールタ「確か、コイツに刺されて。

それから……あれ、わたし無傷？　でも、力が入らない……いや、わたしの魔素出力は下がってない、この糸が強すぎるんだ！」

ルチェリールタ、魔法など使って必死に動く。しかし、糸は破れない。

ニユンリン「動いたってそれは破れないよ……！」

ルチェリールタ「何をした！」

ルチェリールタ、必死に叫ぶ。

ニユンリン「あの時、毒を注入したの。強力な毒だから魔法でも解けないよ。って言うても、害のある毒じゃないから心配しない

で」

ルチェリールタ「あなた、わたしを使って何をするつもり？　話は聞いたわ、ここら一帯を支配してる魔族でしょ！」

ニュンリンをギッと睨む。

ニュンリン、口角をあげてニヤリと笑

う。

ニュンリン「あんたには、あーしを助けてもらおうと思ってね」

ニュンリン、ルチェリールタにキス。

ルチェリールタ「んむっ！」

ルチェリールタ、キスされてうまく喋

れない。

ニュンリン「あんたを魅了して、あーしを助けてもらうからね！」

ルチェリールタ「だ、だれがあなたみたいな魔族に……」

ニュンリン「強がっちゃって。あんたは、あーしの魔法とテクに耐えられる？」

ニュンリンから立ち昇る魔素エネルギー

ー。

ルチェリールタ「！」

ルチェリールタ、ニユンリンの股の男性器に目が吸い寄せられる。

ルチェリールタ「じよ、上位サキュバス……

あんっ！ あんっ！」

ニユンリン「安心して、妊娠はさせないから」

ルチェリールタ、ニユンリンに押し倒される。

ニユンリン「その力であたしを守ってよね！」

ルチェリールタ「んおおお！ んおっ！

おっ！」

ルチェリールタ、何十分もニユンリンのテクを受ける。

ルチェリールタ「あへ、あへ……ぎもち……」

ルチェリールタ、顔がとろつとろになる。

ニユンリン「ざこま〇〇じゃん、騎士のくせして」

○宿屋・レストラン（夜）

シャーザベスラ「で、どうするんだい？」

食事中。

チビイ「どうするって、わかんねえよ」

シャーニューニダ「困ったな……我としては
できるだけ戦力が多いほうがいい」

シャーザベスラ「君、多いほうがいいって言
ってるけどいったい何が目的なんだい？」

シャーザベスラ、シャーニューニダを
見る。

シャーニューニダ「言わなかったか？我は兄
を探すことが目的だと。相手が強敵である
ことは想像に難くないと。実際、大軍でヌ
ノ王都は壊滅したわけだ」

シャーザベスラ「なんだと！　どの口が言っ
ている！　君があそこの主だったんだろう
！」

※ ※ ※

（フラッシュ）

シャーザベスラ、工場内部を見回して

から破壊する。

※ ※ ※

シャーザベスラ「（声を荒げて）君が侵略に協力していた！ 違うかい！？」

シャーザベスラ怒鳴るが、

シャーニューニダ「お前、ルチェリールタを信用したんじゃないのか？」

シャーザベスラ「ぐっ」

言い返され言葉に詰まる。

チビィ「おいおい、そこらへんにしとこうぜ
……そんな言い合いじゃなくてさ、みんな
であいつを助ける方法を考えようぜ！」

チビィ、2人の言い合いを止める。

シャーザベスラ「まさか、君に諭されるなんてね。すごいな君」

チビィ「ボクはあいつのことが大事なだけだぜ」

○（回想）どこかの森

ぐったりして地面で動かないチビィ。

ルチェリールタ（25）「大変！どうしよう

……」

ルチェリールタ、考える。

しばらくして、チビイ目を覚ます。

ルチェリールタ「よかった、水タイプであつてたかな」

チビイ「っ……キ」

ルチェリールタ「大丈夫？」

チビイ「セ……」

ルチェリールタ「セ？セって何？」

チビイ「た、すけて……くれた？」

ルチェリールタ「そうだよ」

ルチェリールタ、にっこり笑う。

チビイN「ボクは今までの記憶がなかった。

よく覚えてなかったから、その時のことを、

あとでルチェリールタに聞いた。ボクはチ

ビイって名付けられた」

（回想終わり）

○宿屋・レストラン（夜）

チビィ「つてことがあったんだ」

シャーザベスラ「さすが、僕が見込んだ聖騎

士だ！ みんなで助けるぞ！」

シャーニューニダ「そうだな。その方が得策
だろうな」

チビィ「ま、ボクは犬より弱いけどな」

一致団結の空気が流れる。

チビィM「団結できた。これもルチェリール
タのおかげだな！」

○同・個室（夜）

チビィが寝静まった頃。

シャーザベスラ「この子、可愛いな……」

と、チビィを見つめる。

シャーニューニダ「起きているな。まだ我を
疑っているのか？」

シャーザベスラ「90パーセント信じてるさ、
利害関係が一致してるうちはね。そうじゃ
なくて、僕を狙ってくるやつらを危惧して
るんだ」

シャーザベスラ、チビイを見つめ続ける。

シャーザベスラ M「……チビイ。君をひと目見た時から感じ取ったよ。いつか、君がすべてを思い出す日が来るのかな……」

○ニュンリンの住処・大部屋（夜）

ニュンリン「はい、ちよつとだけどあげる。

あーんして。あんたには生きててもらいたいから」

ニュンリン、縛られてるルチェリールタにパンを渡す。

ルチェリールタ「ふんっ」

ルチェリールタ、縛られてるためパンを口だけで食べる。

ニュンリン M「よかった、魅了にかかってて。そうじゃないと、毒使いの出したものの食べないもんね」